

俳句

【小学1年生・2年生】

特選 ぴよんぴよんはねたばった手のかごへ

平田小学校1年 飯田 悠星

(評) 虫の飛ぶさまをしっかりと見つける目がこの一句にあります。飛んでいる様

子を「ぴよんぴよん」と言ったところがとてもよいと思います。ふいに現れた虫を、自分の手でつかまえた時の作者のほらしさと自分の手の中にいる虫の実感が伝わります。「手のかごへ」という言葉の表現もよかったですね。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

特選 どんぐりがくるくるまわったよ

鳥居本小学校1年 土田 琥珀

(評) 秋になると、落ち葉の中に木の実を見つけることができます。秋の季語「団

栗(どんぐり)」の句ですが、他の季語の「団栗独楽(どんぐりごま)」のイメージもこの一句は合わせ持っています。手につまんで回る様子を「くるくるくる」という言葉の表現にした所がよかったですと思います。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 あかトンボみぎへひだりへいそいでる

城北小学校2年 真野 裕一郎

(評) 秋の季語の「赤蜻蛉(あかとんぼ)」の句は、夕日に結びつける人が多い中、

「あかとんぼ」の動作だけを注視し観察することで、他の作品とは違う一句となりました。「あかとんぼ」の動きが出ていて大変よかったです。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 じてんしゃのかごにいたよかまきりを

城陽小学校2年 高田 優羅

(評) 秋の「蠅螂(かまきり)」の句。虫取りの用意をしていたわけではなく、捕ら

えた「かまきり」を季語の「虫籠(むしかご)」ではなく自転車のかごに入れたという作者の動作に感心しました。季語が一つになったことで、より「かまきり」が強調されよかったですね。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 あきのそらおいしいいくいきすっている

城陽小学校2年 辻 瑚々音

(評)

季語「秋の空」は澄み切った空、まぶしいほどの青空であったり、晴れ上がった爽やかな日の空のことを言います。慣用句に「天高く馬肥ゆる秋」という言葉もあります。地上は秋の味覚の食べ物がいっぱい。人々だけでなく「秋の空」も「おいしいいくいきすっている」と思いついた所がよかったです。

*慣用句・・・二つ以上の語から構成され、句全体の意味が個々の語の

元来の意味からは決まらないような慣用的表現のこと。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 しゃぼんだまふわふわとぶよまほうだね

城南小学校1年 國安 祐衣

(評)

季節には春夏秋冬があるように季語にも四季おりおりの言葉があります。この句は、春の「石鹼玉(しゃぼんだま)」を用いた句。「しゃぼんだま」をふくらませた後、そのストローから放れてさまざまな色を輝かせながら飛んでいく様子を魔法のしわざと捉えた所がよかったです。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

佳作 こおろぎがあいさつしてるよむしかごで

平田小学校1年 小川 結稀

佳作 くりの木やくりがポツンとおちてくる

亀山小学校2年 岸本 玲

佳作 お月さま金メダルみたいきれいだな

亀山小学校2年 山崎 龍斗

佳作 おちばがねまつかなそらにまいあがる

城陽小学校2年 林 尚桜

佳作 ひまわりとみずうみひかりうつくしい

平田小学校2年 木村 羽玖

佳作 ゆきだるまころころんしもやけだ

平田小学校2年 金井 美里

佳作 風りんがリーンと鳴るよすずしいな

若葉小学校2年 権代

優紗

佳作 くまさんはいっぱいねるよぐっすりよ

城北小学校1年 土田

杏音



入選 かえりみち見つけたくりにごあいさつ

亀山小学校2年 上河

瑛都

入選 たくさんのおちばがゆれておどりだす

亀山小学校2年 田中

柚衣

入選 ひがんばなまつかな花火みたいだね

亀山小学校2年 北川

心結

入選 かぼちやにかおをかいねおぼけだよ

鳥居本小学校2年 岸崎

千夏

入選 そらたかくクリスマスツリーのびるかな

若葉小学校2年 洞田

望宙

入選 よるのそらうちわであおぎほしをみる

城西小学校2年 徳永

明李

入選 ばらのはなくきについてるとげいたい

城南小学校2年 堀田

梨央

入選

いちようのはひらひらおちてキャッチする

城北小学校2年

廣瀬

由騎

入選

あきのやまおちばのふとん気もちいい

城北小学校2年

宮本

千結

入選

しゃぼんだまふわわうくよしちへんげ

城陽小学校2年

日夏

鳳壽

入選

まんげつにすすきもっていえかえる

平田小学校2年

茂森

蓮人

入選

ふじさんはいろもきれいでおおきいな

平田小学校2年

小島

明歩



【小学3年生・4年生】

特選

さくらんぼつるんとおいしそう

城陽小学校3年

林

柚季

(評)

軸に二つの赤い実をつけた「さくらんぼ」をしっかりと観察できています。「さくらんぼ」の実の光沢から「つるんとるん」という言葉が使えました。とても良かったですね。カタカナではなく、ひらかなの「さくらんぼ」なので日本産の丸くて甘い実が伝わってきます。

(彦根文芸協会)

赤木 和代

特選

ふうりんをきいてたのしむそばのいえ

高宮小学校3年

中村

天音

(評)

音は目で見ることでできません。自分の耳を通して自分の心で感じます。「ふうりん」は、風が吹くと音が鳴ります。その音を聞いて涼しさを感じたりします。心地好い「ふうりん」の音に、癒される場所であろう「そばのいえ」を取合せたところが大変良かったです。

(彦根文芸協会)

赤木 和代

特選 プラタナスわかばのいちばんおおきい木

若葉小学校3年 磯嶋 紗帆

(評) 下から見上げる落葉高木のプラタナスの高さや大きさが大変気になったの

でしょう。そして、周囲の木々の葉の大きさと見比べることで大きな感動の句となりました。しっかりと観察できています。大変良かったです。

(彦根文芸協会 赤木 和代)



準特選 こおろぎが葉のしたとおるカサカサと

佐和山小学校4年 出口 歩武

(評) 「こおろぎ」の鳴く声を詠んだのではなく、葉の下を動き回っている様子を「カサカサ」という音で聞き分けているところに感心しました。自分の耳と目でよく観察できました。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 どんぐりがくるくるまわるぼくがかち

城東小学校3年 吉田 瑠雅

(評) 「団栗(どんぐり)」を使って回転遊びをしている楽しそうな顔が浮かんできます。そのままつまんで回しているのもよし。「団栗独楽(どんぐりごま)」をみんなで作って回している様子も見えてきます。「ぼくがかち」と言ったので、回っているどんぐりと止まってしまったどんぐりの動きがよく見えました。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 きれいだな空にかがやく秋の月

亀山小学校3年 中村 樹生

(評) 夜空を眺めると一年中「月」を見ることができます。俳句の中では、「月」は秋の季語。秋の夜は空が澄み、「月」もいっそう明るく大きく照らします。今年はスーパームーンもありました。「秋の月」としたこと、いろいろな形の「秋の月」の美しさが伝わります。「秋の月」を上手に使って感心しました。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 もみじがりまっかになつててれてるね

城西小学校3年 黒柳 芽以

(評) 「紅葉(もみじ)」の美しさを探しに山や溪谷、紅葉の有名な場所に出かけて行くことを「紅葉狩(もみじがり)」と言います。山や野に分け入って、美しい紅葉をじつと見入っていると、まるで紅葉は「まっかになつててれてるね」と紅葉の気持ちを詠んだところに感心しました。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 ひまわりとせいくらべするおとこのこ

平田小学校3年 小杉 海吾

(評) 童謡『背くらべ』の歌詞「はしらのきずはおととしの 五月五日のせいくらべ」が浮かんできます。でもこの句の「せいくらべするおとこのこ」は、夏の「ひまわり」とせいくらべをしています。空に向って大きく育った「ひまわり」と「おとこのこ」の対照が良かったです。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 クリの実をたべてる私リスみたい

亀山小学校4年 田中 暖乃

(評) 「栗(くり)」の実を手を持って食べているかわいらしい様子が見えます。山で見かけるリスも木の実を上手に手に持って食べます。そんなリスと自分を一緒だと思つたところにこの句の良さがあります。客観的に見る事ができたことに感心しました。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 風ぜ入院母の足音やとと来る

金城小学校4年 川原 結衣

(評) インフルエンザになったのでしうか。とてもしんどい思いをしましたね。入院は初めてだったのかもしれないね。病室のベッドに寝かされてしまい、いつもの自分の家のふとんではなくて大変心細かったでしょう。その様子が伝わってきます。「母の足音やとと来る」の表現が大変良かったです。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 ふうりんが風に出会ってわらつてる

城南小学校4年 堀田 真瑚

(評) 「風鈴(ふうりん)」の句。風通しの良い所に吊るされて、音色で涼しさを感じたり、その音色の心地好さを楽しんでいる人の立場ではなく、「風鈴」の立場になってその気持ちを「風に出会ってわらつてる」と表現したところがすばらしいです。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

準特選 虫の声耳をすませばすぐそこに

城北小学校4年 山内 陽太

(評) 「虫の声」がどこからともなく聞こえてきました。辺りは暗闇だから虫の姿は見えませんが。自分の体の耳に神経を集中して、姿の見えない虫の声を聞いてみました。なんと「耳をすませばすぐそこに」という驚きと発見が、伝わる言葉になっています。ここにこの句の良さがあります。

(彦根文芸協会 赤木 和代)

俳句

佳作 あきのかわかぜのはやさについていく

城東小学校3年 北川

結翔

佳作 あかとんぼびわこのうみをとびまわる

城東小学校3年 水野

蒼

佳作 しゃぼんだまこどもはでるがおとなでぬ

城南小学校3年 高橋 みのり

佳作 あきのみちあきのせかいにかこまれる

城北小学校3年 端野 翔太

佳作 きれいだな手がたのおち葉おちてくる

城北小学校3年 林 奏向柊

佳作 さんまはねくちがきいろいおいしいよ

城陽小学校3年 坂本 幸祐

佳作 つなひきで声をからした運動会

亀山小学校3年 河野

光希

佳作 どこ行くのもみじが風にのってゆく

城西小学校3年 飯塚 咲依

佳作 おちばだねあるくとカササいいおとだ

城北小学校3年 井上 美海

佳作 そりすべりみちがながいとたのしいな

城東小学校3年 田部 うみ

佳作 ゆっくりとやさしさおくるせんすかな

高宮小学校3年 中村 天音

佳作 秋の空いろんな実をばくばくばく

城陽小学校3年 寺村 隼汰

俳句

佳作　しゃぼん玉つよくふいたら小さいな

平田小学校3年　奈木　歩生

佳作　いちじくはまつかないろできれいだな

平田小学校3年　佐野　こはな

佳作　松虫や鳴き声楽しむえんそう会

佐和山小学校4年　川口　煌太

佳作　かわきれいこのかわまるであまのがわ

城南小学校3年　塚本　夕唯華

佳作　赤とんぼ大空自由にとんでいる

金城小学校3年　山本　真央

佳作　しゃぼんだまなかはにじいろなんでかな

城西小学校4年　中川　瑠菜

入選　天の川みんなのねがいのせていく

城南小学校4年　西堀　有咲

入選　夕やけが真っ赤になりて町そまる

城北小学校4年　丹治　夏美

入選　満月がみんなの顔をてらしてる

城陽小学校4年　福田　涼真

入選　ゆきだるままんまるおやこなかよしだ

城東小学校3年　柴田　暖音

入選　どんぐりがころころがりどこへゆく

佐和山小学校4年　中森　大雅

入選　うみのなかひかりをあびたさんまだよ

佐和山小学校4年　西村　博幸

入選　やきいもは家族みんなでほっかほか

城西小学校3年　安池　晴生

俳句

入選 まどみればげいじゆつの秋でてくるよ
城陽小学校3年 若林 あかり

入選 たのしいなまあるいだんごおつきみだ
佐和山小学校4年 山下 莉奈

入選 青いそらにうろこぐもがねうかんでる
城陽小学校3年 坂東 蒼衣

入選 おち葉はねパリパリという音がする
佐和山小学校4年 土井 美羽

入選 いねかりはとてもたいへんいそがしい
城西小学校4年 榛葉 悠斗

入選 秋の空くもがたくさんきれいだな
城陽小学校4年 北川 ねね

入選 山道でちいさな秋をみつけたよ
城陽小学校4年 辻 昊成

入選 赤とんぼ真つ赤な空に飛んでるよ
城陽小学校4年 中寫 漱雅

入選 西の空夕焼けしずむ水平線
平田小学校4年 西浦 一步

入選 さくらさくさくらのいろはきれいだな
城北小学校3年 西川 大輔

入選 すすきさんちよつぱり黄色すてきだな
鳥居本小学校3年 土田 瑚々菜

入選 虫時雨いい声うつとり家の中
佐和山小学校4年 馬庭 陽斗

入選 虫の声しぜんといっしよにないている
亀山小学校4年 森 祐人

入選 メダカがねいろいろな色きれいだな
城陽小学校3年 森 善悠

俳句

入選

だるまさんもみじとおなじまつかだね

城陽小学校3年 辻

国也

入選

ひがんばなみるみるまっかもえている

平田小学校3年 金村

紀里

入選

ハロウィンでかぼちやの馬車を作ったよ

城東小学校4年 伊藤

早来

入選

虫時雨みんなであうコンサート

城西小学校4年

伊吹 里咲

入選

よさこいだうんどうかいでおどったよ

佐和山小学校4年 中山

心優

入選

まつむしがきれいになくよがっしょうたい

佐和山小学校4年 高橋

陸久

【小学5年生・6年生】

特選 はかまいり家族みんなでごあいさつ

稲枝北小学校5年 西村 陽菜

(評) 「墓参り」秋の季語。先祖の墓を参ることをいいます。春や秋の彼岸にも墓

参さんは行なわれますが、俳句の上では古くから盆の行事とされてきました。家族そろって心をひとつにお参りされた、毎日の作者の優しさが伝わってきます。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

特選 すずむしがにわでがっしょういいねいろ

稲枝東小学校5年 中村 真沙斗

(評) 「すずむし」秋の季語。庭へ出て聞いているすずむしは、多くの声が入り

混じって一つの声の塊かたまりになって聞こえます。しかし、立ち止まって耳をすますと、その鳴き声には、コオロギ、スズムシ、マツムシなどの声を聞き分けることができます。あらためて「虫時雨むししぐれ」の音色の複雑さを感じている者が見えます。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

特選 スポーツはあせがキラキラかがやくよ

城陽小学校5年 實松 煌斗

(評) 「汗」夏の季語。夏のスポーツは炎昼えんちゆうの日差しが容赦ようしやなく照りつけます。

拭ふいても湧わき出る汗。それでもスポーツは楽しくて懲こりずにまたつづけている作者の姿がそこに見えてきます。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

特選 たいようがひまわりたちとおおわらい

稲枝東小学校5年 池田 陽葵

(評) 「ひまわり」夏の季語。一面のひまわり畑を想像してみると、この表現は

分かる気がします。作者ならではの表現となっています。「黄色」そのものもつ意味また太陽のイメージに最も近い色で生命の躍動感やくどうかん、希望、やる気、満足など前向きまへむきの期待感きたいかんをイメージさせています。笑っているという発想がおもしろいですね。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選 もくもくと空に広がる雲の峰

佐和山小学校5年 宮里 紗佑未

(評) 「雲の峰」夏の季語。夏空にいくつかの峰雲がによきによきと大きくなっ

ていく情景を、雲が空の陣取り合戦じんとりをしているようにもくもくと詠よまれたところがまるで自分の陣地かくだいを拡大しているようでよかったです。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選 運動会みんなの声がかたまります

城西小学校6年 西田 朋花

(評) 「運動会」秋の季語。親子して運動会を楽しめるようになっていきます。そ

うなると子供達は、朝から元気一杯、興奮こうふん気味きみで競きいはもちろん。楽しみなお弁当のときでさえ鉢巻はちまきを外すことを忘れてしまう騒さわぎです。誰にも心当たりのある心こころのときめきを具体的に捉とらえた作品となっています。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選

ドドンと花火で光る彦根城

稲枝東小学校5年 吉田 果桜

(評) 「花火」秋の季語。花火大会は大川端や港湾などで催される号砲一発いよ

いよ大会が始まります。雄大な単発の打上げ花火が規則正しい間隔でさまざまに花園を映し出します。そして何十発目かに、開花するリズムに間があいて、もう終りかと思った時、ドドンと見事な花火が打ち上げられ、また継続しました。城も背景にして大喝采が聞こえます。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選

まつさおな空をおよぐよいわし雲

城東小学校5年 田中 美希

(評) 「翺雲」秋の季語。翺雲は上空八キロメートル以上の氷雲と言われます。

絹雲・または巻雲という上層部の雲ですから、雨は降りません。羊毛の感じで鯖雲とか鱗雲とも呼ばれます。漁師は鯖が獲れると行って喜ぶそうです。雨を降らせるのは中層の雲ですから、翺雲はどちらかと言いますと中途半端な雲ですね。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選

夜桜がふわりまい散りじゆうたんに

城西小学校5年 宮元 陽路

(評) 「桜」春の季語。桜は華やかであるばかりでなく、散り際が見事なことか

ら日本人に好まれている花ではないかと思えます。また桜前線という言葉があるように、桜が咲くと長かった冬から解放され春を感じ、四国での三月末の開花に始って北海道は五月中旬と春が段々と北上していく様子が桜の開花によって分かります。その夜桜の句がよかったですね。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選

ゆうやけやみとれるわたしそまりつつ

城西小学校5年 小川 朋子

(評) 「ゆうやけ」夏の季語。夕焼は四季にあります。夏はとりわけ壮大で荘厳

の感が強いもの。黄昏の空を美しく彩って、日が沈んでも尚、雲や嶺の向うに余炎の残っている事が多いです。都会の雑踏の彼方。海境、山嶺などの夕焼も色々ありますが、この世ならぬ美しさに放心のひとつときなのです。そまりつつがよかったですね。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選 木のおち葉ふむといろんなおとがでる

城西小学校5年 小倉 彩伊伽

(評) 「落葉」冬の季語。落葉を踏むと、カサカサと、心の中を風が通り抜けて行きます。空になった心の中に想い出が甦ります。忘れていた事等を踏むと明日が来る様な感じがします。自分の靴で試したことが一句にまとまりましたね。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選 いちようは黄色いっばいきれいだな

城北小学校6年 三保谷 郁美

(評) 「银杏落葉」秋の季語。黄葉を尽した银杏の葉は一気に散り敷くので地上は黄金を敷きつめた様になります。射す日の光でまぶしく輝いていた银杏落葉が突如、一陣の旋風に巻き上げられた時のおどろき。誰にでもよく解る平明な言葉で表現されていて、その場が彷彿と浮かんできます。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選 ひらひらと上から落ちるもみじかな

城陽小学校6年 古川 みさき

(評) 「もみじ」秋の季語。大樹を見上げ散る紅葉を追いながら、友達と話合っています。散るもみじを押し花にするためでしょうか。平明な句の中に友達表情を想像することができます。「紅葉散る」や「散(ちり)紅葉(もみじ)」という季語を使うとさらに句が深まって良い句になります。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選 コスモスがかぜにゆれたらわらってる

亀山小学校5年 藤堂 楓花

(評) 「コスモス」秋の季語。コスモスの淡く優しい色合いとどんな風にもなびく様から触発された心情でしょうか。心のなかまで波立たせてどの色も笑っている様に相違ないと思えてくる句ですね。

(彦根文芸協会 馬場 美也子)

準特選　　しゃぼん玉ふうわりふわり空のたび

城西小学校5年　高尾　健翔

(評)

「しゃぼん玉」春の季語。しゃぼんの言葉はもとポルトガル語からの由来です。石鹸せっけんを水に溶かし、細い管くだを浸して吹くと、次々に泡が生じ、七彩なないろに光りとんでいく。春の子どもの遊びです。もとより子どもの夢とはことなる。「しゃぼん玉」はすぐにあらわれてすぐに消えるものたえとあります。われわれの夢は空むなしいですね。

(彦根文芸協会　馬場　美也子)



佳作　　あきざくらみちばたに咲ききれいだよ

稲枝北小学校5年　佐渡　優菜

佳作　　かわのぼるさけがぐいぐいがんばれよ

稲枝北小学校5年　園田　天星

佳作　　大きな実必死でさがす栗ひろい

稲枝北小学校5年　山村　歩菜

佳作　　ゆきだるまかぞくでつくるなかよくね

稲枝東小学校5年　大西　瑠花

佳作　　おおさわぎプールのなみともだちと

稲枝東小学校5年　澤　陽菜乃

佳作　　山の中秋の味覚の宝島

亀山小学校5年　若松　あかり

俳句

佳作 まんげつややさしいひかりともしてる

亀山小学校5年 前田 昂紀

佳作 すず虫のきれいな声がひびくよね

佐和山小学校5年 川橋 葵

佳作 帰り道とんぼたちがおにごっこ

城西小学校5年 水野 祈星

佳作 雪だるまみんなで作って楽しいな

若葉小学校5年 山崎 朝陽

佳作 あきがきたじきゆうそうのはじまりだ

佐和山小学校6年 大橋 加歩

佳作 あかとんぼゆうひとかぶりみえないよ

稲枝北小学校5年 西野 美織

佳作 もみじがり家族みんなでピクニック

城西小学校6年 西田 朋花

佳作 虫の音が秋風に乗り鳴りひびく

城西小学校6年 東 香那

佳作 見わたせばあたり一面紅葉だ

城南小学校6年 織田 捺美

佳作 せみが鳴くにわではみんなあそんでる

鳥居本小学校5年 吉田 舞海

佳作 もう赤く風にゆられる草紅葉

城南小学校6年 加藤 煌理

佳作 もみじがねさらさらおちるきれいだな

城南小学校6年 戸谷 敬志

俳句

佳作 やつときた紅葉の季節きれいだな

城北小学校6年

高尾

優輝

佳作 ふんわりとキンモクセイの香りする

城北小学校6年

高淵

早紀



入選 紅葉が風にふかれて散ってゆく

平田小学校6年

高木

美園

入選 そよ風でコスモスゆれて合唱だ

平田小学校6年

高木

美園

入選 たんぽぽがわたとびのちつなげてく

平田小学校6年

吉田

莉央

入選 かまくらをみんなでつくりハイタッチ

平田小学校6年

大橋

由奈

入選 さくらさきはるのかおりにかこまれる

平田小学校6年

川崎

星蒔瑠

入選 赤とんぼ夕日の中を飛んでいる

平田小学校6年

川分

美佑

俳句

入選 もみじの葉色とりどりに変わってる

平田小学校 6年 小川 愛未

入選 弟がとんぼを追ってかけまわる

平田小学校 6年 佐野 はなり

入選 桜さく彦根のお城囲まれる

平田小学校 6年 桑原 佑菜

入選 雪だるま家にかざってとけていく

平田小学校 6年 松山 美月

入選 赤色のもみじの葉っぱ山そまる

城北小学校 6年 山田 詩子

入選 雪合戦みんなで楽しく遊ぼうね

若葉小学校 5年 井上 依也

入選 スポーツに読書に紅葉楽しみだ

城北小学校 6年 山口 栞利

入選 山登り赤色の葉に囲まれる

城北小学校 6年 高松 悠斗

入選 焼き芋のあまいにおいにさそわれる

城北小学校 6年 高松 悠斗

入選 くりのいがあけるとなかにほうせきが

城北小学校 6年 後藤 練

入選 緑から赤にそまったもみじの葉

城北小学校 6年 鳴津 希彩

入選 むしのこえあきが来たこと知らせてる

城北小学校 6年 大森 陽貴

俳句

入選 夕やけを見るとほっこりいきもち

城北小学校6年 大森 陽貴

入選 虫の声きれいな歌声いやされる

城北小学校6年 西田 蒼彩

入選 どんな色そまってくるよ秋の色

城北小学校6年 牧野 亜美

入選 夜にはね虫の泣き声聞こえるよ

城北小学校6年 牧野 亜美

入選 秋の夜虫の声をね感じようす

城北小学校6年 西脇 大耀

入選 なつやすみ家族とあそびたのしいな

城陽小学校6年 小田柿 快陸

入選 うぐいすが春のおとずれ教えてる

城西小学校6年 中川 奈保

入選 美しく風にふかれる秋桜

城東小学校6年 村川 咲綺

入選 あきのかぜもみじがゆれてちつてゆく

佐和山小学校6年 木野 雅姫

入選 しもばしらゆきにかくれてとけてゆく

佐和山小学校6年 宮脇 悠斗

入選 くりごはん食べるととてもおいしいな

城西小学校6年 諏訪 楓真

入選 おほりにねうつるもみじはきれいだな

城西小学校6年 古川 和愛

【中学生】

特選 空あおぎ亡き人を思う盆の夜

中央中学校 1年 千田 真瑚

(評)

お盆の夜は親類縁者が集い、今は亡き人の事を語り合う。馳走も出て話
は尽きない。ふと空を見上げたら盆の月が輝やいている。「盆の夜」を「盆の
月」とされたら佳い句になったと思う。さらに精進されますことを祈る。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

特選 あっけなく夜空に消える流れ星

南中学校 1年 夏川 啓利

(評)

流れ星を眺めている作者。あれこれ願いを考えていたのに流れる星は瞬間
なのである。流れる星におどろいて思っていたこと何も言えず唯々見ている
だけで終わってしまうもの。でもそれが幸せなことと思えばよい。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

特選 じっくりと本読み過ごす読書の秋

西中学校 3年 中山 真稀

(評)

落ち着いて時間をかけて念入りに本を読む作者。読書の秋は作者にとって最
高の季節だ。本からさまざまの知識を得ることが出来る。これからも暇を見
つけて一冊でも多く本を読まれることを祈る。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

特選 読書の秋ページをめくる音がする

西中学校 3年 林田 美咲

(評)

静かな秋の夜。静寂を破って本の頁を繰る音だけがする。父親か兄弟が読
書に熱中しているのである。その様な家庭で育つたことに喜ばしいことと
思う。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 紅葉が辺り一面うめつくす

中央中学校 1年 原 杏奈

(評) 今年は季候の関係でなかなか紅葉の季節がやって来なかった。急に寒さがやって来て、ふと気がつけばどの木々も色づきはじめた。それにいち早く気づいた作者がペンを取り、紅葉が辺り一面うめつくすと写生された一句。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 たくましく畑を守る案山子かな

南中学校 1年 夏川 啓利

(評) 雨の日も風の日も一歩足で立っている案山子。それは畑を守るための大仕事、案山子の気持になった作者はやさしい人だと思ふ。秋の収穫が楽しみなね。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 彦根城水面に映る夜桜や

稲枝中学校 3年 寺嶋 祐貴

(評) 夜の彦根城を見ての一句。桜咲く頃は特に美しい。照明に照らし出された桜の花が城濠一面に照らされて本当に絵葉書そのものです。それに気付いた作者。ただ最後の五文字を、「夜の桜」とされたら更に佳い一句になると思ふ。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 夜桜のバックに映る彦根城

稲枝中学校 3年 陣野 星華

(評) 作者は夜桜の美しいことも言っているが、照明に抜きん出ている天守閣も威風堂々、彦根の誇りとしてのお城の美しさは言うまでもなく多くの観光客を誘っている。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 入学式あらたな一歩が始まるよ

稲枝中学校 3年 玉井 理央

(評) 入学式を迎える人達には何もかも新しい事ばかり、その新しい一歩がその人の人生を作るとも言う。踏み出した一歩を正しい方向へ進まれることを祈る。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 振り返り雪道残る靴の跡

中央中学校 3年 山瀬 もえか

(評) 雪道を歩くと自分の靴跡がくつきり残されている。どこまでもついて行く靴跡。これからの君の人生も同じであることは忘れてはならない、努力すればするだけ結果は生まれてくる。雪道に残った君の靴跡もいつまでも消えない。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 桜咲き心機一転胸躍る

中央中学校3年 山尾 百花

(評) 四月に入り桜花爛漫の季節となった。今までの生活を改め学業にひたすら進むことに、決心したのだと思う。期待や興奮でわくわくしての一句だと思ふ。尚一層の努力を願う。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 テスト前元気をつける栗ごはん

中央中学校3年 大橋 直輝

(評) 栗ごはんはおいしいね。テストの前に元気づける様にとのお母さんの気持ちをいつまでも忘れないでね。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 この店も冷やし中華はじめてる

中央中学校3年 岡田 晃綺

(評) 夏のはじめ街を歩いていると、「冷し中華」をはじめたと言う看板を見る。そして思わず食べたいと思う欲望にかられる。作者はそれに逸早く気付いた。写生の利いた一句。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 衣替え気もち一緒に入れ替る

西中学校3年 渡邊 百映

(評) 俳句では「衣更え」「更衣」とも言う。作者は気持も一緒に入れ替ると、言っている。身軽になって勉強にスポーツに大いに頑張ってほしい。君に新しい世界が待っているに違いない。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 受験生時間が大事思い知る

彦根中学校3年 中村 麻愛

(評) 受験生には本当に時間が大切である。本人ばかりでなく家族も気を使う。でも君だけではない時間は同じように過ぎてゆく「神頼み」と言うこともあるが本人の努力しかない。一分一秒惜しみなく使ってほしい。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 受験生時間だけがすぎてゆく

彦根中学校3年 南 舞衣

(評) 受験生だけ特別な時間がある訳でなく、時間は平等に進んでいる。余り神経質にならず平穏な心で進めばいつか時が解決してくれるのである。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)

準特選 ツユクサにきらりと映える水のたま

南中学校 1年 林 莉々菜

(評) 先ず「ツユクサ」を「露草」と漢字で書いてほしい。夏から初秋にかけて藍色で左右相称の花はとても可憐、きらりと光ったのは朝露である。そこに気付いた作者は俳人である。

(彦根文芸協会 野瀬 章子)



佳作 彦根梨彦根のみんな食べている
稲枝中学校 1年 塚本 一樹

佳作 ほくほくの焼きいもうつつるおじいさん
中央中学校 1年 福居 歩美

佳作 秋風と一緒に走る行き帰り
西中学校 1年 杉本 竜大

佳作 春休み友達新たにできるかな
西中学校 1年 寛 結心

佳作 彦根城月の光で輝いて
西中学校 1年 花本 楓

佳作 紅葉が色づき始める金亀城
西中学校 1年 西岡 真緒

俳句

佳作 秋の夜小さな虫の音楽会

西中学校 1年 一谷 観羽

佳作 湖に映るいろふかきなるアキアカネ

南中学校 1年 山本 翔也

佳作 秋の空あつという間に日が落ちる

南中学校 1年 藤野 有純

佳作 金色の頭を垂れる稲穂かな

南中学校 1年 中畠 毅琉

佳作 どんな日も足一本で立つかかし

南中学校 1年 中田 雄太

佳作 取りに来るぼくをまってるカブトムシ

鳥居本中学校 2年 北川 愛冴仁

佳作 教室に吹く風匂う金もくせい

稲枝中学校 3年 山本 美月

佳作 道の端昨夜の雪がとけ残る

稲枝中学校 3年 安居 優仁

佳作 読書の秋たくさん読んで楽しもう

中央中学校 3年 板東 杏奈

佳作 染まりゆく真つ赤な夕日に見とれてる

中央中学校 3年 居原田 美咲

佳作 炎天下坂道駆けるワンピース

西中学校 3年 竹岡 楓加

佳作 風こがらしや頬に沁みいる塾帰り

西中学校 3年 安達 寛人

俳句

佳作

秋の山絵画のように色づいて

西中学校3年

下村 陸斗

佳作

足あと無い積もった雪を一人占め

西中学校3年

一ノ瀬 拓也

佳作

わくわくと不安がいっぱい入学式

西中学校3年

三田村 奏輔

佳作

コスモスのゆれる坂道下っていく

彦根中学校3年

松浦 瑞希

佳作

天の川浮かぶ願いは星になる

南中学校1年

林 莉々菜

入選

登下校毎日香る金木犀

稲枝中学校1年

早崎 真生

入選

水の中ゆらり泳ぐよ秋刀魚達

稲枝中学校1年

田多井 保孝

入選

秋の風ぶつかる自転車帰り道

稲枝中学校1年

水野 悠久

入選

紅葉が私の街をつつんでく

稲枝中学校1年

木村 真子

入選

虫の音の城にしみ入る月あかり

河瀬中学校2年

白根 拓実

入選

七夕にみんなの願いとどくかな

中央中学校1年

西口 あゆみ

入選

伊吹山美しく染まる雪の色

中央中学校1年

木村 茉緒

俳句

入選 流星消える前に願回事

中央中学校1年

郷野 怜史

入選 あまのがわおそらにひかるおほしさま

中央中学校1年

山下 玲那

入選 名月や光り続ける夜の空

中央中学校1年

上野 莉緒

入選 ふと空を見上げた先には天の川

中央中学校1年

竹田 はるか

入選 みあげるときれいな月がうかんでる

中央中学校1年

近藤 穂佳

入選 初詣で家族の安全願うんだ

西中学校1年

笥 結心

入選 こうようがともきれいなしろまわり

西中学校1年

久保田 優兵

入選 彼岸華月夜の下で輝かん

西中学校1年

阿萬 文音

入選 夜が明け朝日が照らす朝のつゆ

西中学校1年

阿萬 文音

入選 早起きし山に出かけてきこの狩り

南中学校1年

宮越 祐輔

入選 耳近くつくつくぼうし森の中

南中学校1年

疋田 大智

入選 まつむしの声が聞こえる我が家かな

南中学校1年

杉本 創悟

入選 運動会シャッターきる大人たち

南中学校

匿 名

入選 スズムシがとなりの家でないている

南中学校1年

十倉 劍萌

俳句

入選 赤とんぼ空いっぱいにとんでいる

南中学校 1年

松井 唯夏

入選 公園でどんぐりひろう子どもたち

南中学校 1年

野瀬 有菜

入選 波の音どこかさみしい秋の海

稲枝中学校 3年

谷本 詩音

入選 つばめの巣飛び立つひながいと美しい

稲枝中学校 3年

村西 篤紀

入選 風鈴や自然が奏でるハーモニー

稲枝中学校 3年

西村 拓登

入選 あしあとがはつきり見える雪のあと

稲枝中学校 3年

尾崎 礼奈

入選 春の日を受けてかがやく彦根城

中央中学校 3年

本庄 郁弥

入選 お正月今年のほうふかかげよう

中央中学校 3年

大矢 真唯

入選 富士山から眺める日の出美しい

中央中学校 3年

大矢 和輝

入選 びわこにはかもがいつぱいうかんでる

西中学校 3年

太田 結愛

入選 ほっこりとカボチャのスープ母の愛

西中学校 3年

岸田 莉央

入選 桜咲き新たな道を歩きます

彦根中学校 3年

辻 朱音



【総評】

小学生から中学生の応募作品につき、特に俳句の基本を重視しながら、各選者で丁寧な選句を致しました。

- ① 文字の形式 五七五（十七文字）
- ② 季語（季題） 季語を一つ用いる。
- ③ 写生すること。対象をしつかりと見る。

作品の中には、季重なりや無季の句があり大変残念な作品が多かったです。その中で特選や準特選に選んだ作品は、基本の上に発想が素晴らしかった作品や景色の浮かんでくる作品、広がりのある作品でした。

小学生（一年生～二年生）は、可愛らしく、純粋な感性の句があり驚きました。

小学生（三年生～四年生）は、より実感のある句やオノマトペの表現が上手く使えていて大変良かったです。

小学生（五年生～六年生）は、五七七の句が多く、言葉が流れてしまいい損をしていました。また、その時に合った季語で詠むことをしてください。空（天）・周囲（中）・足下（地）にしつかりと目を向けてください。季語は、上句か下句の位置がいいですよ。

中学生は、意欲のある句が多かったのですが、中には季題がない俳句となつて選句から外れてしまいました。また、「や」「かな」

（切れ字）は重ねないという定めもありますので注意してください。勉強も忙しいとは思いますが、一冊でも多くの本を読んでほしいと思いま

す。一生の中でいつか役に立つこともあります。俳句の表現にもつながります。

さて、今年のワークショップは、俳句手帳を用い、五感を重視しながら幾つかの季語の体験をしていただきました。子ども達の感性に私達も驚かされることがあります。次回も沢山の作品に出会えることを楽しみにしています。最後に各学校の校長先生並びに担当の先生方のご協力に深く感謝申し上げますと共に、このような継続もご指導の賜と思っております。また、ワークショップに参加して頂きましたご父兄の皆様にも厚く感謝申し上げます。

（彦根文芸協会 馬場 美也子）

（彦根文芸協会 野瀬 章子）

（彦根文芸協会 赤木 和代）

